

# フィプロニル剤に対する 低感受性イネドロオイムシの発生と薬剤防除

福島県農業総合センター 生産環境部作物保護科

## 1 部門名

水稲 - 水稲 - 病害虫防除

## 2 担当者

松木伸浩・三田村敏正

## 3 要旨

県北一部地域のフィプロニル剤を施用した水田で、イネドロオイムシ幼虫の多発事例が確認された。これまで山形県(上野ら, 2005)、新潟県(石本ら, 2004)で、本種のフィプロニル感受性低下個体群の発生が報告されている。そこで、この地域のイネドロオイムシのフィプロニル感受性検定を行った。さらに、フィプロニル剤と異なる系統の薬剤の防除効果を検討した。

- (1) 平成17年頃から、県北の一部地域でフィプロニル剤を施用した水田でイネドロオイムシの多発事例が確認された。フィプロニルに対する感受性検定を行ったところ、郡山市個体群に対する感受性比は、6.4~7.8であった(表1)。このことから、この多発事例は、イネドロオイムシの感受性低下によるものと推察された。
- (2) 感受性低下個体群発生地域で育苗箱施用剤による効果試験を実施したところ、フィプロニル剤(嵐プリンス粒剤10)の防除効果は低かったが、ジノテフラン剤(Dr.オリゼスタークル箱粒剤)、カルタップ塩酸塩剤(パダン粒剤4)、ベンフラカルブ剤(オンコル粒剤5)の効果は高かった(図1)。

表 イネドロオイムシのフィプロニルに対するLD50値

調査年度	採集地	LD50値(ug/成虫)
2006年	伊達郡国見町 A	0.0093 (7.8)
	郡山市日和町 B	0.0092 (7.7)
2007年	伊達市保原町	0.0112 (6.4)
	郡山市日和町	0.0018

LD50値: 所定濃度に希釈したフィプロニルを供試虫に0.5ul局処施用し、16L8D、20 で飼育した。48時間後に死虫数を調査し、プロビット法によりLD50値を算出した。  
供試虫: すくい取りにより採集した成虫  
( )内の数値: 郡山市日和町個体群に対する感受性比

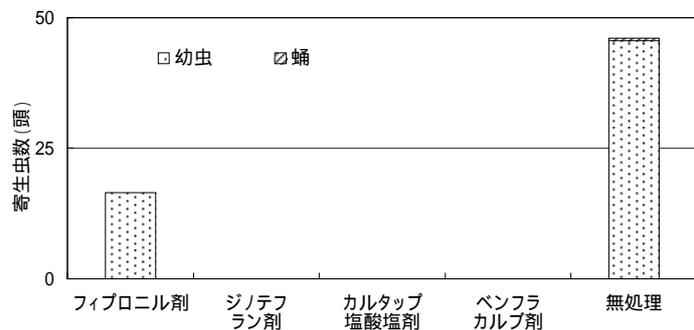


図1 イネドロオイムシの育苗箱施用剤による防除効果  
試験地: 伊達市保原町(2008年)  
調査: 移植33日後、寄生虫数: 9.0株あたり

## 4 主な参考文献・資料

- (1) 上野清ほか(2005)イネクビホソハムシのfipronilに対する抵抗性発達と各種薬剤の防除効果、応動昆49、75-
- (2) 石本万寿広(2004)新潟県におけるフィプロニル抵抗性のイネドロオイムシ個体群の発生、北陸病虫研報53、
- (3) 平成19、20年度福島県農業総合センター試験成績概要(2007、2008)